大都市のマージナルな男たちの比較研究：
日本の「寄せ場」、アメリカのスキッド・ロウ

トム・ギル

はじめに

世界の産業国家の大都市には、みなそれぞれ「スラム」と呼ばれる地域が見られるが、その特徴は国家・都市・時代によって大いに変わる。社会学者は、スラムの種類を研究し、様々な分類を付与してきた。例えば、少数民族のゲットー（ghetto）、腐敗した盟場（tenderloin）、郊外の老朽団地（sink estate）、などである。

こうしたスラムの種類によっては、内部で家族生活が営まれるケースが多いが、本稿では、単身男性が住むスラムの一種類を考察する。このようなスラムの最も有名な例はアメリカのスキッド・ロウ（skid row）と日本の寄せ場・ドヤ街であり、アメリカ人と日本人の社会学者の何人かがこのような2つの単身男型のスラムをとりあげている。本稿では、寄せ場とスキッド・ロウの共通点・相違点を見ながら、その構成・維持・変容における社会経済的、そして文化的な要素のウェートを分析する。

1. 寄せ場とは？

寄せ場 それは日本の下層社会である。そこでは人間が無慈悲に奪われる。だからこそ人間への激しい希求がある。熾烈な闘いがある。」私の言葉ではない。この12年間、日本寄せ場学会が出版する「寄せ場」というタイトルの年報は、必ず表紙にこの言葉が書いてある。そしてこのように続く。「いま寄せ場研究は、寄せ場の現実に切り込み、これを再構成して、そして寄せ場に投げ返さなければならない。」

このような言葉から、場合によって「寄せ場」は非常に大きな意味を持つことがある。寄せ場という表現は普通用語とされがちであるが、寄せ場がその存在を知る日本人の頭の中に「特殊」な意味を持つのは実事だと思う。しかしその意味は、人によって異なる。汚い、臭い、危ない、避けるべき場所だとする人がいれば、かえって寄せ場学会のメンバーのように、その厳しい環境の中で生きるときが「普通」の人間より豊かな人生経験になるのではないかとする人もいる。

具体的な定義から始めよう。寄せ場は、文字通り、「人々を寄せる場所」である。その人々とは日雇労働者である。日雇労働者は週間や一ヶ月単位で働くケースもあるが、文字通り一日契約で働くことがよくある。

日本の主な寄せ場は大阪・釜ヶ崎、東京・山渕、横浜・新宿、名古屋・栃木、川崎・ハラック、広島・雄町、福岡・築港である。「寄せ場」と「ドヤ街」という二つの表現が不注意に使われるケースが多いが、同一のものではない。「ドヤ街」は「ドヤ」という安いホテルが集中する場所である。釜ヶ崎、山渕と新宿の場合、寄せ場（労働市場）とドヤ街（練習宿泊所の街）という両機能が一色になっているが、その他の、より小規模の寄せ場は単なる労働市場であって、ドヤ街ではない。
そこで、「ドヤ街」は「特殊地帯」と同様に差別用語として批判されがちだが、日雇労働者にとっては頻繁に使う言葉である。むしろ、社会学者が好む「寄せ場」という言葉を日雇労働者自身が使うことはあまりない。彼らは場所の実名を使う。例えば釜ヶ崎は「カマ」、谷山は「ヤマ」、寿町は（横浜の）「ハマ」と呼ばれる。

寄せ場では、様々なフォーマルあるいはインフォーマルな仕事の探し方があるが、私の主なフィールドワークの場である横浜・寿町では、主にヤクザに支配される青空市場と政府当局が運営する職安という構造が見られる。

青空市場は以前から変らず、最大の仕事の場である。日雇労働者は朝早く（普通は午前5時頃）寄せ場の道に出て、「手配師」という仕事の仲介人を使う。手配師は路上で日雇労働者と交渉をする。手配師はヤクザの関係者もいれば、独立した商人、建設や船舶の会社の代理人もいる。手配師は「ピンはね」と呼ばれる手数料を取って商売をする。これは賃金の3割程度が普通だと言われる。ヤクザ系ではない場合、ヤクザに「ショップ代」を払わなくてはならないこともある。例えば、私が1993年に知り合った横浜の船舶会社のリクルーターは、毎月10万円を相愛会という組織に支払っていたと言っていた。彼の会社は忙しくない時5人～8人、忙しい時は70人までの日雇労働者を使っているそうだ。企業の規模を問わず、ショップ代は月10万円だと言われる。

相愛会とは、比較的小さな暴力団連合会である。横浜には、稲川会と山口組という大規模暴力団連合会が活躍するが、おおざっぱにいうと稲川会は主な盛り場の売春・麻薬・ギャンブルを、山口組は横浜港湾の利権を、それぞれ押さえている。寄せ場関連の利権は比較的小さいということもあり、割合弱い相愛会に残されているという仕組みだと思われる。ちなみに相愛会の組長は在日韓国人である。

名古屋の場合、笠島で日雇労働者を雇う業者は毎月3万円程度を「名導親睦会」という組織に支払っている。これはやはりイナバ会という暴力団の隠れ場である。名古屋の暴力団のうち、このイナバ会だけは山口組に入っていない。つまり、ヤクザの世界の中でも、寄せ場は一流ではなく、二流・三流の暴力団の縦張りでありがちである。

「立つ」の意味
さて、日雇労働者と手配師の間の人間関係は大いに経済の要因に影響される。日雇労働者は音楽で「タチノボ」と呼ばれることがあるが、不景気の時は、日雇労働者は「アルキンボ」になる。つまり、仕事が少ないときは、慌てて手配師を探し回る。逆に、労働力不足のとき、手配師の方が焦って、歩いたり走ったりして労働者を探し、現場に行くように説得しようとする。なお、人によって、「立つ」と「歩く」は全く違う意味を持ち、寿町で一年間不法就労をして、その間の自伝としてUnderground in Japanという本を書いたフィリピン人のレイ・ベントゥーラ（Rey Ventura）はこう語る。

「立ちっぱの男たちは娼婦のようなものだ。雇主たちは鈍く目を光らせて、ぼくたちを値踏みしようとする。彼らは若くて丈夫で、誰がかかるかを確かそうな者を好む。...立っているところを見せるのも大切だ。坐りこんでいると、仕事場でもただぶらぶらしているだけだろうと思われかねない。」

サチャーたち（"sacho"：日本語の「社長」のタガログ語化：雇主や親方や手配師、ボス役）の下で働く仲間たちを上から下まで眺めまわし、こちらは知るかぎりの方法でいていけにあいきつつ無し。不合格を知らせる彼らのやり方は、あいさつを返さないことだ。このちょっとした屈辱の儀式で、毎日がはじまる。
そしてぼくたちは無条件で彼らの手に命をあずけるのだ。」（ベントゥーラ1993：62-3）

つまり、ベントゥーラにとっては、「立つ」という行動には屈辱の意味がこめられている。自分を商品のように、買い手に見せるのだ。対照的に、釜ヶ崎で知り合った新谷登（しんや・のほと）という日本人のベテラン日雇労働者はこう語った。

新谷：大阪では、日雇労働者は「アンコウ」とも呼ばれる。アンコウという魚はじっと海底で待っていて、より小さな魚が来ればそれを食べる。日雇は同様、いい仕事をじっと待つ。\(^2\)
私：でも、ちょっと違うんじゃない？
だって、カマの労働者は持つのではなく、一生懸命に探しているように見えるけど。
新谷：確かにそうだ。本当に残念なことだ。俺が青年だった頃、釜ヶ崎の日雇はこういったけない感じで仕事を頼み込むことはなかったよ。もうちょっとプライドがあったよ。仕事を頼み込むより腹を減らした方がよかったです。

こう言って、新谷は昔の日雇の立ち方を見せてくれた。無関心な顔。腕を組んで、堂々と立つ。「とてえすごく腹が減っていても、とてえずっと食ってなくても、それでもプライドが残る。武士道ということ知っている？本物の侍は絶対に衣食住を人になかまない。数食食べなくても、そういう素振りを見せない。俺たち、日雇もそういったものだった。手配師は来るだろう。俺たちはただ立つだけ。作業服を着て、道具を持っていることで仕事をやる気があると相手に見せる。すると手配師は「新谷さん、今日はちょっと手不足だから、手伝ってもらえるかね？」と言って、俺は何も言わずに、マイクロバスに乗ってわけではない。それではまだ俺のやり方だし、周りを見れば動かない年上の人に見かけるけど、残念ながら俺達はごく少数になってしまった。別に人のせいにするつもりじゃないけどね、特に今、不景気だから仕事がうんと少ないからしょうがないだろう。それにしても、残念だな。」

（フィールドノート、1994年8月6日）

ベントゥーラと新谷の話はそれぞれ物語るナラティブとして読むのなら、前者は第三世界から来た肉体労働者に対する日本の採用者の蔑視を痛感する。しかし、採用者が寄せ場に来る理由は何といっても労働力が必要だからというわけで、新谷の態度は、手配師と日雇の力関係が必ずしも一方的なものではないという認識を反映する。結局この二つの「立つ」の解釈の差は日本人と外国人の差よりむしろ、寄せ場の労働力不足時代の経験の有無の差であろう。新谷の「道具」への言及に見られるように、職人としての技や道具の有無もその解釈に多少影響すると思われる。

ところで、ベントゥーラの発言から、彼は売春婦を蔑視すると分かるが、デイ（Day 1999）のロンドンの売春婦の論文では、場合によって売春婦もプライドを持って、単なる商品化されるものではなく、自分の肉体と「技」を商品にする事業家というセルフ・イメージがあると指摘されている。彼女たちのナラティブはある種の日雇労働者とかなり似ている。とにかく、売春婦と日雇労働者の共通点として挙げられるのは、やはり商売するとき毎回毎回買い手と交渉し、仕事をするかどうかを自分で決めるところである。この点が、大都市の労働者のほとんどと大きな違いである。毎日同じことをボスの命令に従ってやるのではなく、ある程度、自分で選択、決断する自律的な存在である。

とにかく、ベントゥーラと新谷という極端に違うナラティブから見えるのは、日雇
労働のコンテストされる文化的な意味である。私が寄せ場で出会った労働者にも、やはり、その身分を積極的な選択とみなす人もいれば、単に人生に失敗したとしか思わない人もいた。

当局の役割

日本の中央政府と各都市は昔から日雇労働と玉虫色な、矛盾だらけの関係を維持してきた。16世紀の末、所謂「自由労働」は安定した Amateur の取り扱いと封建的な主と使用人の関係を象かすとして、豊臣秀吉が日雇労働を厳しく管理しようとした。だがやはり江戸時代の町作りや城作りには膨大な、かつ順応性のある労働力が欠かせない。つまり自由労働は必要であると同時に「危ない」ということで、当局は色々工夫して、推進と制限を兼ね行った。1788年で隅田川の河口で設立された「人足寄せ場」という強制労働収容所はその一つの有名な例であり（渡辺1994年）、これは現在の「寄せ場」の語源とされる。

20世紀の日本においても、その「推進と管理」のアプローチは崩れていない。特別な日雇向きの職業安定所は産業革命以来存在し、現在主な寄せ場に見られる。釜ヶ崎、若宮、寿町にはそれぞれ2〜3ケ所ずつの職安がある。その一つは中央労働（労働省）の施設で、もう一つは県・市の外郭団体が運営する（ギル1999年）。建築前に、その目標は労組の労働市場を無くすことである。この働きが今でも寿町の職安は日雇労働の雇用のせいぜい10%しか管理していないと職安の職員が私に認っている。山谷の事情は寿町のそれとあまり変わりない。一方釜ヶ崎の当局は「相対方式」という制度を用い、路上手配の免許を発行することで、市場のより大きな部分をよりルーズな形で管理している。

労働省の職安で登録すると労働者が自分の顔写真や登録番号付きの「日雇労働者手帳」（通称、「白手帳」）を発行してもらい、これを持つと日雇失業保険に加入できる。二ヶ月に3500円以上働くと、その次の一ヶ月は、仕事を取れない平日、一日7,500円の「あふれ手当て」が手に入る。この制度は当局の日雇労働者に対する懲戒の現れである（ギル 1999）。臨時労働労の有効性を認め、日雇労働で何とか生活できるようにしてくれる。だが一月13日程度仕事を確保する能力が無くなければ、保険加入者の資格を失って、収入が激減すること。すると失業から貧困、貧困から野宿、野宿から野営という過程が一気に加速する。建設業と港湾に必要な労働力で保証し、要らない労働者を急速に処分するという制度なのである。

2. スキッド・ロウとは？

私はよく日本人に「イギリスに寄せ場やドヤ街みたいところがありますか？」と聞かれる。もちろんイギリスにはスラム街があるし、不安定労働もある。しかし寄せ場のような「臨時労働者が毎朝大勢集まる労働市場」、ドヤ街のような「（主に）単独男が使う簡易宿泊所がたくさん集中している地域」が見當たらない。ところが、アメリカにはかなり似た存在がある。それは「スキッド・ロウ」である。

この事実そのものには意味があると思う。本質主義的に表象される「日本」と一枚岩的なものと捉えられる「西洋」が比較されることがまだまだ多いと思うが、この寄せ場・ドヤ街現象においては、単純に言えば日本とアメリカは似ているが、イギリスや他のヨーロッパの国々は違う。

さて、小学館ランダム・ハウス英和辞典によると「skid row」は「（米・カナダ）とや街（のような所）。A skid row bum、どや街に飲んだくれ [ぐるたら]」つまり、（差別用語としての）ドヤ街、主流社会から転落した者の集まりというような感じである。

そういうと、私が先ほど描写した「労働
者の街・寄せ場」とかなり離れたイメージである。ところが、skid rowの意味はこの百年間、大きく変わってきた。一般のアメリカ人「skid row」の語源を聞くと、「on the skids」の関連語だとよく聞かれる。「skids」は「滑り台」や「滑りやすいところ」ということで、人が「on the skids」であれば、その人が「滑っている」つまり、「落ち着いている」、社会・経済的に失败に向かっているということである。そして、滑ってしまったしたら、結局ホームレスになってしまった、他の「滑り者」（落ちこぼれ）と「並んで」、skid row、「滑り者並び」という最低の場所で人生が終わってしまう。

ところが、この広く信じられている説明は事実とは違うのである。元々スキャット・ロウは社会・経済的な失敗と特に関係がなかった。最初のスキャット・ロウのスキッドは文字通りの「滑り台」であった。その滑り台はワシントン州シアトル市にあった。シアトルは山林に巻き込まれ、山林業が昔から大産業である。世紀の変わり目あたり、ヘンリー・イェスラー（Henry Yesler）という人の製材工場がその山の麓にあった。木こりたちは山の上の木を切って、一種の滑り台を使って丸太を下の製材工場に送っていた。その滑り台の横の通りに、木こりが使う安いホテル・バー・レストランが並んでいて、その「滑り台通り」は「スキッド・ロード」と呼ばれるようにになった。後にその名前は他の同様な通りに当てはめられ、次第に「ロード」がなまって「ロウ」に変化したのである。今は「skid row」を「木こりの集まる町」という元々の意味で紹介しているのは大型辞典においてだけである。

戦前アメリカの大都市はだいたいスキッド・ロウ地帯があった。ロスアンジェルスはサウス・メイン・ストリート（South Main Street）、ボストンはスコーレ・スクエア（Scollay Square）、ボルチモアはプラット・ストリート（Pratt Street）、等（Hoch and Slayton 1989:29）。だがおそらくアメリカの最も有名なスキッド・ロウはニューヨークのハーレー（Bowery）とシカゴのホベミア（Hobohemia）であった。前者は19世紀の半ばまではブロードウェイの近くの庶民的な盛り場であったが、20世紀に入って次第に单身男のスラム街になった（Giamo 1989, Sante 1991）。後者はホボ(hobo、渡り労働者)がたくさん集まるホベミア（bohemia、つまり放浪的なホベミアン生活者の地帯）から作られた言葉である。

このホベミアは戦前のスキッド・ロウ分析の代表的著作、ネルス・アンダーソンの「ホボ」（Anderson 1923）で詳しく述べられている。日本の寄せ場学会が出版している「寄せ場文献100選」（寄せ場学会1990年）に唯一の外国語の本はこの「ホボ」である。アンダーソンは自分でホボの生活を経験してから中年になってシカゴ大学に入学し、大学院での研究を地元のホベミアで行って、この名作を書いた。スキッド・ロウを70年間研究している社会学のシカゴ学派はこの本から始まったと言っても過言ではないだろう。

「ホボ」を読むと、本当に驚くほど、戦前ホベミアが現在の日本の寄せ場に似ているとすぐ気がつく。主な共通点は以下の通り（アンダーソンの引用は全て拙訳）。

I. 安いホテルとその窮屈な部屋。ホベミアでは、「オリ」(cages)と呼ばれている。個人部屋以外に、山谷や釜ヶ崎のベッド・ハウスに当たる、更に安い、6〜8人の男が大部屋で寝るタイプもある（Anderson 1923:31）。宿泊のパターンも似ている：永住者かいれば季節によって2〜3ヶ月泊まる出稼ぎタイプ、そして一泊だけで姿を消す放浪タイプもいる。

II. アンダーソンがホベミアに見た「少なくとも5種類」の男たちは寄せ場にも
見られる。季節の出稼ぎ（seasonal worker）：流動的な臨時労働者（hobo）：「夢を見ながら放浪する」放浪者（tramp）：「放浪も労働もあったにしない」怠け者（bum）：そしてずっとホベヘミアに暮らし、近くで働く「ホームガード」（homeguard）はそれである（同89）。寿には、人数が少なくなってきが、主に東北地方から冬、農閑期に出稼ぎに来る労働者がまだいる。アンダーソンのhobo/tramp/bum区別は主観的な概念で、働くか働かないかは彼が言うほど明確なことではないが、寿にもあまり働かない人も結構いるのは事実である。そして同じドヤに、家具のまるでない部屋と、ものがいっぱいでほとんど動けない部屋もある。所有物の多い人は遠くに行って食事で働いてもドヤ代を払わなくてはいけないので、主に近くで働く「ホームガード」タイプであり、所有物のない者はいつでもどこへでも行ける。日雇労働者の世界では物を持たることは必ずしも幸福と見なされることは限らない。そういう理解はアンダーソンが見た浮浪者にも共通する。

III。ホベヘミアにも、公的市場と私的市場の二重労働市場がある。但し、公共職安は同じだがホベヘミアの手配師は寿町のほとんどの手配師と違って、店を持つ（同110－117）。

IV。ホベヘミアにも、労働人口の割合は不明だが、一日契約を専門とする労働者がいる（同117－120）。

V。ホベヘミアにはアルコール依存者はたくさんいた（同134－5）が、麻薬依存者はあまりいなかった（同67－9）。より一般的に言うと、スキッド・ロウは「飲んだくれの集まり」というイメージだが、ホックとスレートン（Hoch and Slayton 1989；87）によると、今までのアメリカ・スキッド・ロウ研究ではアルコール依存者は、他の地域よりはるかに多いが、まだまだスキッド・ロウ人口のごく少数である。同様に、30年間寿町でアルコール依存者サポートで働いている村田良夫さんにとると、寿町の人口の3割程度は「何らかのアルコール問題があり、その半数強（つまり、総人口の約15－20％）は依存者と呼ばれるでしょう。同時に、総対数酒者は約20％で国の一般人口の平均を上回る」（インタビュー、1994年11月19日）。麻薬の場合、寿町で出合ったディーラーによると、「患者は30人程度で、寿町の人口の約1％である（フィールドノート、1993年7月7日）。

VI。ホベヘミアの人口は圧倒的に単独男が多かった。アンダーソンらの調査では8割くらいは独身、5－8％は既婚者、残りは離婚者、やもめ、別居者である（Anderson 1923：137）。現在の寿町には既婚者は更に少なく、私が寿町で知った158人の日雇労働者の内、「女房と一緒に暮らしている」と言ったのは6人だけであった。

VII。山谷と釜ヶ崎はそれぞれ風俗街の吉原と飛田の隣だが、ホベヘミアも売春街の側だった。「この女たちはMain Stem（文字通り、「主な軸」、ホベヘミアの中）に暮らすのではなく、その隣に住む」（同142－3）。

VIII。ホベヘミアの近くには、小屋地帯があった。Flophouse（ドヤ）の家賃を払えない男が自分で小屋を作って、ちょっとした「小屋コミュニティー」で暮らしていた（同11）。寿町の場合だと隣内駅のガード下にそういう小屋の群れがいつも最近まで見られ、山谷の場合だと隅田川に面する小屋やテントの長い列があるし、釜ヶ崎の近くの動物園の前にも大型テント村がある。

IX。アンダーソンが見たホベには詩を書くことを趣味にする男たちが多かった（同194－214）。寄せ場労働者の間にも詩人
大都市のマージナルな男たちの比較研究

43

がかりて、「寄せ場詩人」という雑誌さえある。単独男の自由と寂しさはスキャッド・ロウと寄せ場の詩人の共通なテーマである。

X. ホボたちを労働組合に組織させようとする、あるいは労働問題や福祉問題の関連でホボたちと団結に戦う左翼の集団は色々あった（同230-249）。この集団はそれぞれ路線が違って、しばしばお互いに喧嘩をし合っている。残念ながら、全く同じ問題は寄せ場の戦後運動史に見られる。派閥戦争や内ゲバの織り返しである（據1977、船便1985など）。

XI. アンダーソンのインフォーマントが家出をした理由としてあげた原因には以下が含まれていた：一時的な出稼ぎから何なく家に帰らなかった、失業してしまって収入がなくなった、身体障害や精神的問題からなかなか安定した仕事を望めない、アルコールや麻薬の中毒になってしまった、「人格が弱い」、個人的な危機から逃げなければならなかった、人種や民族差別、放浪癖（同61-86）。私は寿町や山谷でこのようなナルティビをすべて日雇労働者から聞いたことがある。

言うまでもなくアメリカの戦前スキャッド・ロウと日本の現在の寄せ場の間に相違点もみられる。特に、

I. 労働者を使う産業が多少異なる。ホボたちはよく農業労働者として働き、アメリカの鉄道建設の黄金時代にはその線路を作る作業のために数ヶ月も遠い現場で働くことがあった。今の日本の日雇労働者は主に建設・土木産業で働いている。

II. アンダーソンは何回も「安い店」のような書き方をするが、私の経験では寄せ場の店は決して安かない。むしろ外の店よりも値段が高いケースが少なくない。一日の労働で疲れた労働者は遠くまで行きたがらないし、賃金は現金の形でもらって手に持っているので、ついカモにされることが多いという印象である。

III. 戦前・戦後問わず、スキャッド・ロウの民族誌を読むと必ず物乞いの話が出る。私の経験では、ドヤ街では多少せびったかったことがあるあっても、露骨な物乞いはありません。

3. スキャッド・ロウの歩み

さて、80年前のアメリカの現象と今現在の日本の現象を比較する作業には価値があるのだろうか？

この質問に答えるには、まずスキャッド・ロウの歴史を振り返る必要がある。労働市場としてのスキャッド・ロウの盛んな時代は今世紀の最初の30年間であった。20年代にはもう下り坂にあった。シカゴのホボヘミアの人口は1907年に約60,000人（Sollenberger 1911: 9）で、1923年に約30,000人に半減していった（ただし冬には増加する）（Anderson 1923: 13）。鉄道はほぼ完成していたし、農業の機械化も伝統的なホボの仕事を次第に減らしてしまった。1930年代の大不況はさらに大きな打撃だった。そしてスキャッド・ロウはまず他の「労働者の町」から「脱落者の町」に変わった。このため、第2次世界大戦の後、「ホボ」というかなりロマンチックな言葉のかわりに、「スキャッド・ロウ・パーム」（skid row bum、スキャッド・ロウのようだ）という差別用語がよく使われるようになった。アメリカの経済が成長し、仕事が出来る人が段々安定した職業を見つけ、スキャッド・ロウに行かなくなる。残るのは主に仕事の出来ない人という道筋だった。

人口が更に減って、1958年のmain stem（シカゴのスキャッド・ロウ：もはや「ホボヘミア」が消え、その中心街だけが残っている）の人口は約2,000人（Bogue 1963: 82）。他方、ニューヨークのパワリーのスキャッド・ロウの冬人口は1949年に約
13,000人だったが、1971年までは3,000人に減少した（Bahr 1967:42）。同時に高齢化は激しいベースで進んだ。アンダーソンが見たホボたちは主に18歳から35歳までの年齢範囲にいた。しかしボーグの1958年のアメリカ全国調査では、スッキッド・ロウ人口の47%は若年対象年齢以上だった（Bogue 1963:6）。パワリーの場合、1930年の人口の75%は50歳以下であり、1966年には75%が50歳以上だった（Hoch and Slayton 1989:97）。同時に、主に労働階級の白人だったスッキッド・ロウ人口に黒人やヒスパニックの人たちが次第に割合を増やしていた。

アメリカではスッキッド・ロウは社会病学と見なされ、80年代以来、段々とすぼまれてきた。「Clean up skid row」（スッキッド・ロウを一掃しよう）は政治家の決まり文句で、同時にケースによって都市の膨大化の結果、スッキッド・ロウのある場所は一等地になり、ドヤを壊してミドル・クラス以上の住宅街にする金銭的なメリットもある。これは所謂「urban renewal」（都市更新）企画で、たくさんのアメリカの都市に見られてきた。より俗語的な言い方では「gentrification」（高級化）である。スッキッド・ロウの地域を「新住宅地帯」と指定し、ドヤの法律的な環境を極めて厳しくする。同時に家賃がドンドン上がり、レストランやバーが閉店してしまう。最後に、壊したドヤのところに高級マンションを建て、建設会社や不動産会社は儲けるし、町の自治会も「社会のガン、スッキッド・ロウを洗い流したい」と言い、支持率を増やす。このプロセスはMiller (1982)、Rossi (1989) やGiamo and Grunberg (1992)で描写される。

シカゴやロサンゼルスにはまだスッキッド・ロウと残っているが、ニューヨークのパワリーの最後のバー（名前はAl's Barである）は1993年のクリスマス・デーで閉店してしまった（Giamo 1994:1, 15）。

パワリー、多分アメリカの一番有名なスキッド・ロウ、はこれで存在しなくなったと言っていだろう。また皮肉なことだが、1995年5月8日の英サンデイ・タイムズではパワリー地域がトレンドィーな若者の一流プレイ・スポットとして紹介された。高級化のベースは正に速い。

しかし、スッキッド・ロウの住民たちが突然存在しなくなることはない。現在アメリカは深刻なホームレス問題に面している。スキッド・ロウがまだあったとき、一種のコミュニティであり、労働力供給機能をある程度果たしていた。今の米国の大都市では、どこへ行ってもホームレスを見てもおかしくないという現状である。この町中はまいてある野宿者は所謂“new homeless”と呼ばれる。そしてスキッド・ロウを潰したのは本当に良かったかという疑問を持つ人も多い。

4. 寄せ場とスキッド・ロウの比較の意味

寄せ場とスキッド・ロウの単身男のスラム街としての共通点はたまには研究者の目を引くことがある。歴史的な段階や各研究者の理論的な構えにより、その比較の結論が大分違ってくる。ここで5人の日米研究者の寄せ場・スキッド・ロウ論を簡単に紹介してみたい。

まず60年代の土田英雄（土田 1966a、1966b）とカルロ・カルダローラ（Cal-darola 1968）である。土田（1966a）は1920年～1960年という時間枠を設定し、シカゴのホボヘミアを釜ヶ崎と山谷に比較する。その40年間では、①ホボヘミアは労働者であるホボの街から「老令者・アル中患者・身体障害者などの都市生活の敗残者のための場所」としての場所になった。逆に、ドヤ街は明治時代の木質宿集中地区からドヤ街に変身する（同203）と共に、「かつての貧民・窮民のウェイトがむしろ減少して、アソコ・立ちん坊
などと呼ばれる単身未熟練肉体労働者がなち極めて流動的な移動労働者のたまり場に変質して行った」（同204）。

② ホテルセミアはヨーロッパ人移住者のスラム街→労働プール→「社会保障の谷間」へと、マクロ経済学的な要素に応じて変わるが、東京、大阪の木宿寄街の成立・発展・変遷にはたえず行政的要因が強く作用していた（同205－6）。必要な労働力の交通の便利な所に置くと同時に、問題を起こしそうな社会階層を警察の管理しやすい所に集中させる。つまり、米国と日本の比較は自由経済集計を計画社会・経済型の区別である。

③ ホテルセミアの人口は夏季30,000人冬期75,000人（1920年代）から約12,000人（1959）まで減少したのに、山谷は大正末の2,500人から60年代の約15,000人増加し、釜ヶ崎は同時期に約4,000人から15,000人まで増加したという（同206－7）。「それは日本のドヤ街が労働力のプールとしての機能をますます発展させており」（同207）、「わが国のドヤ街が、現在のアメリカの状態をそのままうけついで行くとはとうてい考えられないだろうが」（同213）。

土田が「寄せ場」という言葉を全く使用せず、それと「ドヤ街」の区別をしないのは問題である。土田はホテルセミアとドヤ街の両方を社会問題として見なす一方、日本のドヤ街は労働市場としての機能的な面を残していると分析している。機能しているからこそ、スキッド・ロウとは逆に人口を増やしているというニュアンスを感じることができる。

ところで、同年的別の論文（1966b）では土田はかなり異なると思われる議論を展開し、ドヤ街がホテルセミアと同じパターンで変容する可能性を認めてい。会社がより安定した労働力を確保するために、ドヤ街から離れた場所で「労務者専用アパート」を造るようになる傾向を見て、「このようなにして特に労働力が吸収され、ただ未熟練高齢労働者だけがとり残されて、それが家族制度や社会保障制度の網の目からこぼれ落ちてくるときに、わが国のドヤ街も現在のシカゴのドヤ街と類似した形態になる」と指摘する（土田1966b:63）。

この論文のドヤ街の将来予測は1966aの論文より的を得ている。しかし、ここではドヤ街はより病理的に見なされ、「単なるドヤおよびドヤ街の改良計画ではなく、思い切ってドヤ街そのものを絶滅させようという計画」と（同64）が必要だと主張する。

残念ながら具体的な計画を提供してはいないが、土田が意味するのは多分「男が主流社会から離れ、ドヤ街に住むようになる必要のない社会を作る」だろう。しかし面白いことに、30年後でアメリカの貧困研究者、ジェンックス（Jencks 1994）は昔のスキッド・ロウ（つまり安部屋+日雇労働市場）の再構をホームレス問題への対策として提案するのである。確かにジェンックスを批判する米国の学者もかなりいるが（例えばGiamo 1994:6）、この「常識の逆転」は日米の差ではなく、この30年間の両国はホームレス問題を全く解決していないことを意味するのではないかうか。

さて、カルダローラ（Caldarola 1968）は他の二つの土田論の前者に近い。彼はイエズス会士の社会学者で、1964年で東京横浜・名古屋・京都・大阪・神戸という六大都市でドヤ街の事情を統計的に調査した。労働条件、手配師の収入、 Chunk牧场とドヤ街の相互関係、住宅事情、結婚状況など、当時の日本語の文献（土田ののもも含めて）には見当たらないところまで、重大的な情報を集めている。ドヤ街を同時期のスキッド・ロウと比べると、「驚くべき類似した特徴」（amazing traits of similarity同523）が見られるという。「二者はドヤ、安いレストラン、古物屋、行商人、家族のいない人、社会的に孤立している人、日雇労働者、ルンパで代表されるし、同性愛、
売春やアルコール依存の率がみとなそれぞれ高い」（同、拙訳）しかしカルダローラは同性愛と売春の「高い率」の統計的な根拠を提出しないので、ここで彼の偏見を表現しているのではないかという疑問が残る。彼のドヤ街の人間関係に対する見方にも問題がある。彼によるとドヤ街には「共同的な生活のほほん完全な不在」（an almost complete absence of community life 同 513）があり、「ドヤ街は完全な匿名で生活を行う個人の集まりとして言い切れる」（同）。なるほど、個人主義者や一匹狼がドヤ街に多いが、男同士の間の助け合い・仲間意識、日雇労働者としての文化的アインデティティ、ドヤ街に対する情熱的な愛着、こういう現象を見なかったのはカルダローラが完全ドヤ街の社会に入らなかったからだとも思われない。1946年から30年間以上山谷にいた堀大介の著書には寄せ場の共同的な生活・意識がよく表れている1）。

なお、カルダローラは以下の異なる点も指摘する。①ドヤ街の人口の33%は絶対禁止者でポーグのアメリカのスクリッド・ロウ調査の人口の絶対禁止者は15%にとどまった（Bogue 1963）。②スクリッド・ロウの人はよく物乞いをするが、ドヤ街の人ではない。カルダローラはペネディクト（1946）の言葉を借りて、これは日本が「恥の文化」だからと言うが、なぜ「共同的な生活のほほん完全な不在」の社会には「恥」があるか語ってくれない。③政治的に、ドヤ街の人は左翼でスクリッド・ロウの人は保守的という傾向があった。④ポーグがインタビューしたスクリッド・ロウの人のは5割以上は定期的に教会に行っていたが、ドヤ街の人は「宗教に関して知識も関心も全然なかった」（Caldarola 1968：524）5）。⑥米国のスクリッド・ロウ社は確実に縮小し、1950年あたりで総合人口が10万人を割っているとポーグ（Bogue 1963：8）が言うのに対し、ドヤ街の人口は増加傾向にあり、スクリッド・ロウの住民は主に老人なので、近所には若者が圧倒的に多い。これから数年間ドヤ街の人口が増加する見込みだとカルダローラは言う。

その21年間も後で1989年に出版された青木秀男の文献は「ドヤ街」より「寄せ場」いう表現を使うが、それにスクリッド・ロウを比較したとき（青木1989：54－57）、意外にカルダローラと似た結論にたどり至る。「①スクリッド・ロウには、老年層が多い。寄せ場には、壮年層が多い。②スクリッド・ロウには、労働「不能」の者と第二次産業就業者が多い。寄せ場は第二次産業就業者が多い。③（略）④スクリッド・ロウの人間関係は、匿名的、一時的、功利的である。…寄せ場では、…人間関係の秩序化・集団化がみられる。⑤…スクリッド・ロウは完全なアノニミー社会ではない。スクリッド・ロウ文化の中心は、アルコール常習者の飲酒文化である。…寄せ場文化は基本的に日雇労働者の生活様式としてある。そこでアルコール文化は部分的なものでしかない。⑥地域の社会的性格として、スクリッド・ロウは、解体型スラムにより近い。寄せ場は、統合型スラムにより近い」（同56－7）。

この見解には一つ問題がある。まず青木は1989年現在の寄せ場とそれに近い時期のスクリッド・ロウを、両方タイプレム存在として扱う。実は両方とも常に変わりつつある。彼はこの問題を意識し、注43で、「近年、寄せ場は、一方でスクリッド・ロウ化」をしていると、注44では「近年、労働者の老高齢化がめだつ」と認めていて（同 67）。それに、寄せ場とスクリッド・ロウが同じ軌道にあるという結論に青木は違和感を感じる。彼はどうしても「飲むスクリッド・ロウ住民」と「働く寄せ場住民」に縛らせる。寄せ場の労働供給の役割を非常に強く強調するため、彼らに関して「働き人（ど）」という造語を頻繁に使う（1989：9等）。
そして左翼運動家の立場から書く青木はその「プロレタリアートの街」に過度の憧れを見せせる。寄せ場では「人びとは〈ミシメ〉から〈ホコリ〉へ移行する。〈ヒトリ〉から〈ナカマ〉へ移行する。寄せ場はめざされるべき「解放」と「自由」の千年王国となる（同177）。残念ながら、こういうロマンチックな話を現在の、または1989年の寄せ場住民に示せば皮肉な笑いを買うだろう。しかしながら、寄せ場とスキッド・ロウの区別として指摘するポイントはカルダローラのものとあまり変わらないのに、結論は正反対（「完全なアノミーの集まり」対「ナカマたちの千年王国」）になるのは印象的である。各論者にとかして現実を自分のイデオロギーに合ったように解釈をしながらであるかを明白に示すのである。


私が知っている限り、最新の寄せ場・スキッド・ロウ比較論は吉田幸司の『寄せ場』（吉田 1995年）である。この論文では「ドヤ街」の簡易宿泊所の機能も含めていう意味で「寄せ場」という言葉を必ず「…」で囲まれている（同78）。そして、現在の寄せ場と現在のスキッド・ロウの比較論者を批判しながら、20年代のホホヘミアと60年代の寄せ場というとても特別的な比較を行う。スキッド・ロウについてはアンダーソンが相変わらず主なソースとして、私が以上で示したものとかなり似た共通点のリストを提出し、（同80－92）。「寄せ場」は日本のホホヘミアである（同92）と結論している。20年代以降のホホヘミアの下り坂を文献で見て、1940年まで「地図からは労働過程に付随する施設がなくなってしまって」（同93）。寄せ場は似たような運命を辿らない理由は特になく、その存在は「近代資本主義社会によって論理的に然に保証されたものではなく、姿を変えたり、あるいは消滅してしまうこともあり得存在であるということをわれわれは確認しておかねばならない」（同94）。

それは確かであり、吉田が提案する「社会変動研究」のアプローチは寄せ場とスキッド・ロウに適用すべきだろう。ただ残念なのは、吉田の分析は一つずつの歴史的な瞬間で留まり、その変動の過程を充分認識していないことである。1995年の論文で1964年の釜ヶ崎を「現代」のように扱うには無理があるように思われる。それに、複雑な歴史の過程を単純化してしまうところ
もある。例えば、スノーとアンダーソンを引用し、「1920年代の中南部でホバの時代は終わった」（吉田 1995：92、Snow and Anderson 1993：14）と言い切るが、実は現在の米国でもホバが細々ながら存在する。毎年アイオワ州のプリット市（Britt, Iowa）で大会を行い、「女王」も選挙で選んでいる（Moon 1996）。社会学者はすぐある社会組織の「死」を発表する傾向があるが、場合によってまだ生きていることもある。スキッド・ロウもうようである。ベアーや三十一年前「少しずつ消えつつある」（Bahr 1967）と伝え、ミラーは15年前スキッド・ロウは「解体されている」（Miller 1982）と書いた。しかしアメリカは大きな国である。ハワリーが消えたとしても、西海岸のスキッド・ロウ（ロサンジェルス、ポートランド、シアトルなど）は解体されていない。特にロスのスキッド・ロウは都市の中央商業地区の隣で、そこに住んでいる数千人のホームレスはロスの地方政治の大きな問題点になっている（例えばGoetz 1992）。

そして、吉田の1923年のホボヘミアと1964年の釜ヶ崎の比較に1964年のホボヘミアと1959年の寿町のデータを加えてもみると、寄せ場とスキッド・ロウが文化的に全く異なった空間であるとは言い切れないことが分かる（図1）。

ホックとスレートンはスキッド・ロウの連続性を強調し、60年代のスキッド・ロウは「ジャーナリズムや学者が描写するアル中の墓場より（戦前のシカゴ・ホボヘミアの）メーン・ストリートに近かった」、「住民の大半は貧乏な労働者で一番よくある特徴は病院ではなく貧困であった」（Hoch and Slayton 1989：94）と記述している。そして、アンダーソンは1940年まで労働紛争が消えたと言っているが、1964年には1ヶ所だけが残っていた。

ところで、どちらかと言えば上の数字より実際は共通点が多いだろう。釜ヶ崎と寿町の手配師は店舗を使わないから「人材派遣業」はゼロになっているが、その機能はもちろんある。占い店もゼロだが、寄せ場労働者の多くは占いに関心を持っている。

図1 ホボヘミアとドヤ街の施設の時間的変動の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>簡易宿泊所</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>人材派遣業</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>レストラン</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>バー</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>安心飲食店</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ギャンブル系</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>占い店</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>薬局</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>伝道団</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>床屋</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>食料雑貨店</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>クリーニング</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>タバコ屋</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>酒屋</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>喫茶店</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>質屋</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>駐車場</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>空き地</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

酒は普段寄せ場の食料雑貨店で売られるからこそ「酒店」はないし、1923年の関東大震災では飲酒法のせいで寄宿を作ることが出来なかったという特別な事情があった。たとえその統計で取り上げられる街の中心通りではないが、日本の大型ドヤ街は必ずキリスト教の伝道活動がある（救世軍のような団体があり、彼らと一緒に讃美歌を歌うと食事がもらえる。この習慣は米国では「sing for your supper」、日本では「アーメンでラーメン」と呼ばれている）、等。

終わりに

寄せ場とドヤ街の共通点・相異点とそれに関する文献を考えれば考えるほど一つの結論が浮かんでくる：この二つの組織を分けるのは文化ではなく時間とマクロ経済の要素である。日本のプライドを持つ日雇労働者対米国の寂しいアル中のような区別は通らない。戦前のホボの何割かは労働者のホリティカルと社会階級意識があったのは明らかである。アングリーソンに戻ると世界産業労働者組織（Industrial Workers of the World）、米国史上一番ラジカルな労組のメンバーはかなりいたし、ホボヒミアの政治的な講演会に大勢の人が集まっていた。そして私の寄せ場の経験から言っても、労働者意識の強い人といえば、自分が失敗者だと考えている人間も多い。大きな区別を定義しようとする作業には無理がある。どこの、いつの寄せ場をどこ、いつのスキッド・ロウと比べるかによって、印象が異なってくる。年代学的に見るとこの2種類の都市地帯はほぼ同じ軌道に沿って動いている。主な相異は年代的なタイミングである。

つまり、米国は日本より早い時期から産業化・現代化・大都市化が進んだ。それに、臨時労働を必要とした産業はいそっそ早く変わった：鉄道作りは主な鉄道の完成と共に終わり、農業が日本よりずっと早く機械化された。ピークは1880年〜1920年である。大不況から、長い、ゆっくりした、二度と復活のない衰退が始まった。寄せ場の場合、盛んな時代は戦後20年間ぐらい。ピークは1964年の東京五輪で、70年代のオイルショックはやはり長い、ゆっくりした、二度と復活のない衰退が始まりであった。

現在寄せ場の高齢化は一年に1歳に近いペースで進んでいる。平均年齢53〜4歳。平均死亡年齢60歳くらい。仕事の数がパブル崩壊に積極的に減少している。例えば労働センターの統計によるとそこで取り組まれた労働契約員延べ数（つまり、契約数×各契約の日数）は1985年から1995年までの10年間で145,160人日から52,738人日へと約65％も激減した。同時に、宿者の人口は確実に増加している。釜ヶ崎周辺の10月1日平均ホームレス人数は91年で100人程度から、97年で400人を越えてしまい、その後更に増えている。98年の末、大阪府匠300人が35人の宿者のテントを釜ヶ崎から強制撤去した。毎日、ホームレスの人数がじりじりと上がっている。毎日、寄せ場とスキッド・ロウの差が少しずつ縮小している。20世紀の末からこの100年間の歴史を振り返ることにより、寄せ場とスキッド・ロウは根本的には同一のものだということが明らかになったと思う。

巻末注
1）日本語の文献では「スキッド・ロウ」と「スキッド・ロー」という表現は共によく見られる。ここでは前者を選んだ。
2）ただし、「アンコウ」ではなく「アンコ」と発音されることがある。語源を江戸時代に倉庫で働いていた「餃子仲仕」という説もある（Leupp 1992: 134注60）。
3）この言葉は日本語化されるとき、「ホーボー」として「ホーボー」と「ホーボー」と両方がある。日本語の「方々（ほうほう）歩き回る」が語源で、19世紀アメリカの鉄道で働いた日本人移民労働者が輸入したという説もある。ただし、「hoe boy」（くわ小僧）、つまり渡り農作業者という、もう一つの説得力のある説明もある。An-
derson (1923)を和訳した篠村英一が「ホボ」にしているので、本書ではそれに準じた。
4）例えば、以下は松本武（1977：523）に書いてある詩の一部である。
こんなに会うこともないが
時々お会いすること
やろばなないときだけは
だから、皆さんを
会いたいときには
皆さんに
わたしたちのまち
皆さんに
わたしたちはふるさとさんや
この詩は確かに「匿名」だが、これは決して
「コミュニティ・ライフが完全にない」と言
われるような社会の表現ではないと思う。しか
も、カルダローラのインフォーマントの23％は
家族を持たず、結婚もせず、完全に個人とし
て生きているとはとても考えられない。
5）ただし、カルダローラが調査した628人のイ
ンフォーマントの12％は、創価学会の信者だとい
う重要なデータもあり（Caldarola 1968：
524）。創価学会のメンバーでありながら、社
会生活に参加しない。個人レベルで特に宗教的な行
動をしていないという。
6）朝日新聞、1997年11月24日朝刊、1面。
7）京都新聞、1998年12月28日朝刊、1面。

参考文献

齋木秀男
1989「寄付家を労働者の生と死」明石書店

橋本光佑
1977『山谷戦後史を生きてる』(下) 細川文庫

高木、トム
1999「寄付家が日本で公益・結婚なしの生活者を共同研究・男性論」藤野美穂、西川
照子編 人文書院（近刊）

住宅協会（編）
1964『大阪市完全住宅案内手帳』

読川政次郎
1994『長谷川平蔵、その生涯と人足寄付寄付』中公
文庫

土田英雄
1966 a 『ドヤ街の比較研究』大阪学芸大学紀
要』15号203－215
1966 b 『ドヤ・ドヤ街・ドヤモン』都市問題研
究 18号54－64

船本州治
1985「死って野たれ死ぬな－船本州治遺稿集」れ
ンが書房新社

ペントゥーラ、レイ
1993「ぼくはいつも隠れていた」松本剛史訳 草
思社（Ventura, Rey, 1992. Underground
in Japan. Jonathan Cape．）

吉田潤司
1995「ホボヘミアと「寄せ場」：「寄せ場」の社会
変動研究へ向けて」京都社会学年報
3号、1995年12月、77－96。

寄せ場学会
1990「寄せ場文献100選「寄せ場」第3号、187
－207 現代書館

Anderson, Nels.
1923 The Hobo: The Sociology of the Home-
less Man. Chicago and London: Phoenix
Books. (篠村英一訳、「ホボ－無宿者に関
する社会学的観察」、東京経済大学、1930
年)。

Benedict, Ruth
1946 The Chrysanthemum and the Sword.
Houghton Mifflin.

Bogue, Donald
1963 Skid Row in American Cities. Chicago
University Press.

Caldarola, Carlo
1968 "The Doya-Gai: A Japanese Version of
4, 511－525.

Giamo, Benedict
1989 On the Bowery: Confronting Homeless-
ness in America. University of Iowa Press.

1994 "Order, Disorder and the Homeless in
the United States and Japan." In Dosh-
isha American Research, Vol.31. Dosh-
isha University.

Giamo, Benedict and Jeffrey Grunberg, eds.
1992 Beyond Homelessness: Frames of Ref-
erence. University of Iowa Press.

Goetz, Edward G. 1992 "Land use and homeless policy in Los
4, 540－554.

Hoch, Charles and Robert A. Slayton
1989 New Homeless and Old: Community and the Skid Row Hotel. Temple Uni-
versity Press.

Jencks, Christopher
1994 The Homeless. Harvard University
Kooi, Ronald V.

Leupp, Gary P.

Miller, Ronald J.

Moon, Gypsy

Rossi, Peter H.

Sante, Luc

Snow, David and Leon Anderson

Solenberger, Alice
ABSTRACT

Comparative Research on Marginal Men of the Metropolis
— Japan’s Yoseba, the USA’s Skid Row —

Tom Gill

Among the various kinds of slum district to be observed around the world, the majority are characterized by some kind of family life. However, the skid row districts found in US cities, and the yoseba and doya-gai districts of Japanese cities, are/were largely inhabited by single men, whether bachelors, divorcees or widowers. This paper offers a brief description of both institutions, comparing their features and reviewing some earlier attempts at cross-cultural analysis of the two.

Yoseba are open-air casual labour markets, where day labourers gather early in the morning to negotiate work with specialist recruiters known as tehaishi. Doya-gai are urban districts with concentrations of cheap lodging houses where day labourers often dwell. In three famous cases—Kamagasaki in Osaka, San’ya in Tokyo and Kotobuki in Yokohama—the employment and dwelling functions are combined in a large-scale yoseba/doya-gai.

Skid rows are commonly thought of as districts populated by social failures, such as alcoholics and the mentally unstable. However, I try to show that the pre-war skid row was quite similar to the contemporary yoseba/doya-gai, with employment agencies arranging casual work for the hobos who lived in them and a culture oriented to casual labour. My key reference is Anderson’s The Hobo (1923), which describes Chicago’s Hobohemia district in terms that make it sound remarkably similar to Kamagasaki or San’ya. This similarity has struck several Japanese and American scholars over the years, and I discuss the contributions to this debate by Tsuchida (1966), Caldarola (1968), Aoki (1989), Giamo (1994) and Yoshida (1995). Though the skid rows have suffered a steady decline over the course of this century, and in some cases have been destroyed in urban renewal programmes, I conclude that there is no fundamental cultural difference between them and the yoseba.

Japan’s socio-economic environment has allowed the yoseba to retain their labour pool function long after it has largely disappeared from skid row, but the decline in the casual labour market which set in after the oil shocks of the 1970s, and has greatly accelerated since the bursting of Japan’s “bubble economy” at the start of the 1990s, is making the yoseba/doya-gai districts look more like skid rows with every day that passes.